

# 令和3年冬、万世大路「二ツ小屋隧道巨大氷柱」実見記

万世大路研究会（大滝会）

鹿摩貞男

## はじめに

1月17日（日）、旧国道13号（旧万世大路）二ツ小屋<sup>ずいどう</sup>隧道の巨大氷柱を見学してきたので報告する。

去年は、暖冬の影響で巨大氷柱は出現しなかったけれども、今年1月9日山友から今年は例年程ではないが結構見られる氷柱が出現しているとの情報が齎された。それで早速いつものメンバーと出かけたという次第である。

ところで、今年は筆者が山口屋散人さんのお誘いを受けて二ツ小屋隧道巨大氷柱を見学し始めてから丁度10年目の節目の年となる。その平成23年2月、超弩級の巨大氷柱を目の当たりにした時の感激は忘れられないものがある。途中空白の年もあるがここ数年は毎年見学に行っている。

今回は、10周年を記念して本報告とは別に3編の特集記事を加えた。その一つ目は、この10年程（中抜きあり）の状況を振り返り印象に残る写真のダイジェスト版を掲載した。またここでは、平成21年2月の写真の提供をおばらさんから受けたので併せて特別に紹介する。

次に、最初に見に行った平成23年2月は、忘れもしない東日本大震災の1ヶ月前のことであったが、二ツ小屋隧道米沢側坑口に超弩級の巨大氷柱が出現した。後にも先にも当該箇所には巨大氷柱は出現していない。特別版として、「万世大路をこよなく愛する」山友の皆さんから当時提供を受けたこの米沢側の写真を改めて紹介する。

3番目の特集として、筆者の手元にある旧国道13号（5号）の過去の冬季状況写真を氷柱に限らず紹介する。また、筆者自身ほとんど行くことのない栗子隧道側の冬期状況について、これもまたおばらさんから貴重な写真の提供を受けているので併せ紹介するものである。

なお、本報告書の理解を助ける上で役に立つと思われる二ツ小屋隧道情報を[「参考資料」](#)として別途PDFに示したので参照されたい。

## 雪山斜面を直登

天候は無風曇天で太陽の光が雲の後ろにうすく輝いている。気温は、大滝地区駐車帯路端にある気温表示版が1℃を示していた。積雪は何日か前のもので新雪ではなく、国交省の二ツ小屋観測点では約140cmとなっており、我々の登山ルート<sup>の</sup>積雪深でもあろう。雪山の山上がりには絶好のコンディションである。

いつもであると万世大路（二ツ小屋隧道）見学時のように国道13号東栗子トンネル福島側坑口駐車帯へ集合するのであるが、今の時期は除雪作業の邪魔になるらしく昨年あたりから駐車禁止となっているので手前の二ツ小屋駐車帯9時半集合（出発）とした。ここから、東栗子トンネル福島側坑口手前の旧国道への連絡道路上り口（新栗子トンネル換気塔）まで約1km、国道13号を歩いて行った（約20分）。

国道から新換気塔までは管理用通路が 100mほど整備されている。新換気塔から旧工事用道路（旧大滝運搬路）までは、取付坂路（コンクリート舗装済）が設置されている。この区間には元々林道が取付いていて、旧工事用道路を経由して旧国道へ連絡していたわけであるが、換気塔の新設によって林道が無くなったため、兼用となる換気塔管理用通路及び取付坂路が一種の機能補償的なものとして設けられたものである。新換気塔の工事に先立ち、連絡道路（林道部）の代替機能の確保を申し入れているけれども、もとより当局としては計画していたものであったろう。

夏場の場合は、二ツ小屋隧道へは新換気塔から連絡道路約 1.0 km（約 20 分）、旧国道約 1.2 km（約 30 分）で休憩時間を含めても 1 時間程度で到達できる。冬場は、これらの道路は行かずに、二ツ小屋隧道前の旧国道まで、雪に覆われた斜面ブッシュの上をほぼ直登して行く。従って距離は 2 km 程度と短くなり、時間も短くなるどころであるが、途中休憩時間を多く取ったので、今回は 1 時間 20 分ほどを要した。帰りは、30 分もかからないで下りて来る事ができる。

ところで高低差であるが、東栗子トンネル福島側坑口の標高が約 530m、二ツ小屋隧道の標高が約 700mなので 170mほどである。また、旧国道の連絡道路入口の標高は約 630mなので、高低差は約 100 mとなる。

10 時前、E13（東北中央自動車道）新栗子トンネル換気塔前でスノーシューを装着し上り始める。旧工事用道路までは取付坂路を上って行くが、坂路に設置されているガードレールは雪で埋まっていた。

**(写真 1-1~5)**



写真 1-1 国道 13 号東栗子トンネル福島側坑口、右側建物旧換気塔（現在廃止）。左側非常駐車帯、手前 E13（東北中央自動車道）新栗子トンネル換気塔管理用通路。



写真 1-2 新換気塔前、連絡道路・取付坂路を上る。換気塔管理用通路から望む。



写真 1-3 手前取付坂路、ガードレールが雪に埋もれている。建物は新旧栗子トンネル換気塔。左側 R13 東栗子トンネル旧換気塔（現在廃止）、右側 E13 新栗子トンネル用、稼働中。右奥の山は葡萄沢山（直下が東栗子 T u）



写真 1-4 連絡道路（旧工事用道路）から小川（国道 13 号）対岸のモダ沢地区を望む。峰の右側の反対側に“幻の大滝”がある。建物は旧換気塔。



写真 1-5 連絡道路からイワイノ沢地区(モダ沢地区左側)望む。  
峰の中央の反対側に“不動滝”がある。

取付坂路から上は、連絡道路ではなく雪の積もったブッシュの上の斜面をほぼまっすぐに登る。30分ほどで旧国道（昭和期旧国道 13 号）に到着する。直登して行くけれどもほとんどは楽な斜面であるが1箇所急なところがあり最大の難所である。途中、カモシカのものであろうか真新しい足跡を見つけた。お暇な御仁がいるようで立木の回りを一回りしている人がいる。 **(写真 2-1~6)**

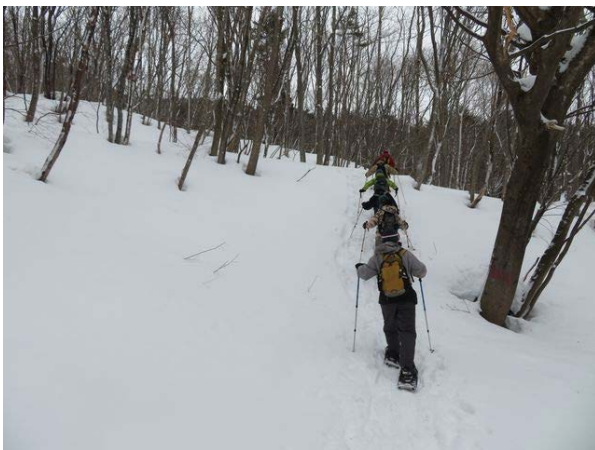


写真 2-1 雪山斜面ブッシュの上、道なき道を進む。



写真 2-2 真新しい足跡。何の動物、カモシカ…熊は冬眠中だよ。



写真 2-3 お暇なお方がおられるようだ。一回りされている。



写真 2-4 急勾配、最大難所。これをすぎれば旧国道へあと一歩。





写真 2-5 旧国道 13 号到着、米沢側を望む(昭和の大改修で新設されたバイパス部起点付近)。右上明治の七曲坂第 1 号カーブ付近。左側にボランティアの小型バックホーが雪に埋もれている。



写真 2-6 旧国道 13 号、福島側を望む。写真中央、連絡道路入口(標高約 630m)。

旧国道から上では、明治期万世大路「七曲坂」を突っ切っていく。途中には旧国道 13 号(「昭和の大改修」によるバイパス中間部)を横断するところもあり、両者は、酷似していて紛らわしく間違えう恐れもある。斜面は若干きつくなるが二ツ小屋隧道前の旧国道に到着したのは丁度 11 時であった。

**(写真 3-1~5)**



写真 3-1 旧国道(昭和の大改修バイパス起点付近)から斜面を上る。旧七曲坂の 2~4 段目道路を突っ切る。



写真 3-2 旧七曲坂、第 1 号カーブ。



写真 3-3 旧七曲坂、3 段目道路米沢側 3 号カーブ跡を望む  
(3 号カーブは昭和の大改修で消失)。

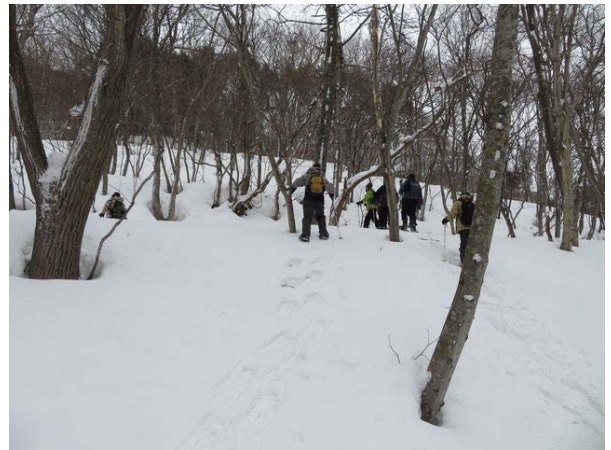


写真 3-4 旧国道(昭和の大改修バイパス中間部)からニツ  
小屋前旧国道を目指す。  
途中、5 段目 6 段目の七曲坂を突っ切る。



写真 3-5 ニツ小屋隧道前旧国道に到達。明治の七曲坂  
第 6 号カーブ付近。第 7 段目道路(旧国道に  
改修)、米沢側、隧道方向を望む。

到達箇所からは、数分で坑口に到着、登り始めてから約 1 時間 10 分である。昨年とは打って変わり深い雪に覆われ、御駐輦記念碑「鳳駕駐蹕之蹟」は見えなかった。記念碑は、台座を含めると 1.2m あるので、積雪はそれ以上であることが確認できる。

(写真 4-1~3B)



写真 4-1 ニツ小屋隧道福島側坑口到着。



写真 4-2 ニツ小屋隧道福島側、坑口から坑外を望む。





写真 4-3 A 坑口前、雪に埋もれた御駐輦記念碑(鳳駕駐蹕之蹟)と山神碑。記念碑高さ1.2m(台座含む)。左端、二ツ小屋隧道福島側坑門。



写真 4-3 B 秋季の御駐輦記念碑と山神様。左端、二ツ小屋隧道福島側坑門。 R021105

なお、以下の報告では「氷柱」と「つらら」を原則的には使い分けている（厳密ではない）。これは筆者の感覚的なものであってオーソライズされているものではないことを念のためお断りしておきたい。一見すると文字通りの氷の柱で巨大な円柱状（或いは壁状）で原則的に天井から路面まで続いているようなものを「氷柱」と呼ぶこととしている。これらの「巨大氷柱」について、民家の屋根などに棒状に垂れ下がって冬期間普通に見られる「つらら」と一緒くたに呼ぶには違和感を感じざるを得ないからである。従って、円柱状（若しくは壁状）の大きなものを「氷柱」（ひょうちゅう）、多少大きめのものも含め棒状でぶら下がっていて通常の「つらら」を連想できるものはそのまま「つらら」と表現させていただいた。

## 巨大氷柱実見記

### (1) 坑口付近の 1 番目と 2 番目の氷柱群

二ツ小屋隧道福島側坑口から奥を覗くと微かに氷柱群が見え、その間に米沢側坑口のあかりも見る事ができる。坑口から 20m ほど進んだ所に延長約 30m の最初の内巻補修区間（注）がある（仮称第 1 号内巻）。内巻箇所は、天井や壁に段差（厚さ約 30 cm）があるのですぐ分かる。（写真 5-1~3B）



写真 5-1 福島側坑口から奥(米沢側)を望む。覆工段差は第 1 号内巻部。



写真 5-3A 左側最初の氷柱群(第 1 号内巻区間)、右側 2 番目の氷柱群(第 1 号内巻端部)。奥に巨大氷柱群(第 2 号内巻区間)が見える。



写真 5-2 第 1 号内巻福島側から奥(米沢側)を望む。



写真 5-3B 8 日前の左側最初の氷柱群。  
岡部達也様撮影提供 R30109

福島側坑口から 1 番目の氷柱群は、その第 1 号内巻区間米沢寄りの左側(南側)の側壁(トンネルの脇の壁)及び天井から出現する。時期にもよるけれど冬季外には勢いよく湧水が吹き出しているところがある。その場所に来る氷柱はそんなに大きいものではないけれども、路面には、ほとぼしり出た湧水がそのまま凍り付いたような見事な凹凸模様の氷盤が見られることがある。今年は暖かいせいかな冬季でも湧水があり、その着地点では氷盤が形成されず穴になっていて、脇の氷盤も綺麗なものではない。なお今回は、その同じ場所の天井の打継目うちつぎめと思われるところにも比較的大きな氷柱が見られた。

(写真 6-1~6)



写真 6-1 最初の氷柱群。第 1 号内巻区間左側(南側)、福島側から望む。



写真 6-2 氷柱群、側面から望む。  
湧水着地点は穴になっている。





写真 6-3 最初の氷柱群。米沢側から望む。



写真 6-4 氷柱発生部、右側の氷柱の上から湧水。



写真 6-5 湧水箇所



写真 6-6 湧水着地箇所<sup>ウチツグメ</sup>に氷なし。

なお、表示している距離関係はいずれも歩測等による推定値で正確なものではなく目安程度と理解していただきたい。

#### 注 内巻補修<sup>ウチマキ</sup>について

内巻とは従来の巻立コンクリート（トンネルの壁や天井のこと※）が劣化した為その内側にコンクリートを打設して補強すること（二ツ小屋隧道では厚さ約 30 cm）。

福島県において昭和 27～28 年度に二ツ小屋隧道補修工事施工。27 年度分巻立工約 70m（推定）。昭和 28 年度分「(工種) 巻立工（工事内容）延長 201.8m」（『福島土木監督所五十年史』福島土木監督所、昭和 30 年 5 月 1 日）

下記サイトも参照されたい。

『平成 26 年群馬県高崎市有志による万世大路探訪会報告』（[1] 内巻コンクリート 5 ページ）

<http://ootaki.xsrv.jp/takasaki-2.pdf>

#### ※ 巻立<sup>マキタテ</sup>コンクリート

トンネルは地山（地中）掘削後その表面は土や岩石の状態になっている。その素掘表面をコンクリートや石材などを使って覆い天井や壁を造り空間を確保することを巻立と云う。その使用材料によりコンクリート巻（立）、木巻、煉瓦巻、石巻などと称する。できたものを覆工<sup>フクリ</sup>と云う。

その第 1 号内巻補修区間の米沢側端部（打継目<sup>ウチツグメ</sup>）の右側（北側）にも氷柱があり路面にも氷の塊ができています。2 番目の氷柱群である。今回は比較的大きな氷柱となっているようだ。路面の氷塊も何かを連想させるような年もあるが今年は特にそれはない。当該箇所は、夏場でも漏水が特に目立つところではないが、近年巻立コンクリートの劣化が進み一部崩壊し始めていて心配な場所の一つである。

（写真 7-1～4）





写真 7-1 第 2 番目氷柱群、第 1 号内巻区間米沢側端部  
右側。奥に第 2 号内巻区間が見える。  
門番のような氷柱が真ん中にあり、その背後  
に巨大氷柱群。福島側から望む。



写真 7-2 米沢側から望む氷柱群。  
氷柱左側は巻立コンクリート(覆工)崩壊箇所。



写真 7-3 側面から望む氷柱群。



写真 7-4 米沢側から望む 2 番目(左側)と 1 番目の氷柱群。  
第 1 号内巻区間を米沢側から望む。

## (2) 巨大氷柱群(第 2 内巻区間)

第 1 号内巻から 20m ほど米沢側へ進むと 2 番目の内巻補修区間(仮称第 2 号内巻)がありその起点部付近には、まるで門番のようにやや細めの氷柱ができていた。例年、つらら状に垂れ下がっている事が多いけれども、今回は細いとはいえ天井から路面までしっかりと氷柱を形成していた。

(写真 8-1~4)



写真 8-1 第 1 号内巻(米沢側)から第 2 号内巻を望む。  
門番の氷柱と巨大氷柱群をはるかに望む。



写真 8-2 第 2 号内巻箇所手前(福島側)から米沢側を望む。



写真 8-3 第 2 号内巻箇所、門番氷柱を米沢側から望む。



写真 8-4 門番の氷柱は文字通り天井から路面まで柱のようになっている。奥は巨大氷柱群。

さらに 20mほど米沢側へ進むと、第 2 号内巻区間の福島寄りになるが本日目当ての「巨大氷柱群」が現れる(福島側坑口からは 100m程の所と思われる)。それらの前に立つといつもながらその巨大さにまず圧倒され、この天然の造型美を前にしばし見とれてしまう。本当に見事というほかない。これら「巨大氷柱群」には、大きいものが 3 箇所あり中央に垂れ下がっているものが一番大きいと思われる(中央氷柱)。その高さは、トンネルの高さ自体が 5.1mなのでそれぞれの氷柱は 5mを超えていることになる。この中央氷柱は、天井部では 2 本のように見えるが、路面では 3 本に枝別れしていた。年によってはまとまって 1 本の円柱状に見えることもあり、その場合は直径が 2m近くなる。今年の左側(南側)の氷柱は、中央氷柱と比べ遜色なく、むしろ中央氷柱よりもしっかりと路面まで円柱状になっている。例年は下部が竹箒のように枝別れしている事が多い(南側氷柱)。さらにその数メートル米沢側奥にも少し小振りであるけれども透明で美しい氷柱がこの 3 本の外に見られる。右側(北側)には、氷柱が 2 本見られるが、例年だとこれらが合体して壁状になった華麗なる氷柱が道路中央近くまで伸びていることが多い(北側氷柱)。

(写真 9-1~4)





写真 9-1A 巨大氷柱群正面を福島側から望む  
(第 2 号内巻区間福島寄り)。



写真 9-1B 8 日前の巨大氷柱群正面。  
岡部達也様撮影提供 R30109



写真 9-2 巨大氷柱群正面 a  
中央氷柱: 2 本の氷柱が根本では 3 本に枝別れ。  
1 本の氷柱にまとまる年もある。



写真 9-3 巨大氷柱群正面 b(やや左側から望む)  
左側(南側)氷柱: 中央氷柱よりやや細い。



写真 9-4 巨大氷柱群正面 c(やや右から望む)  
右側(北側)氷柱: 2 本の氷柱になっているが  
例年は連続した壁状の氷柱になる。奥の氷柱も  
見える。

これらの「巨大氷柱群」は、福島側から眺めた場合と米沢側から見た場合ではその様相がガラリと異なり興味深いものがある。また脇から眺めた場合なども別の姿に見えて面白い。

(写真 10-1~4) (写真 11-1~9)



写真 10-1 巨大氷柱群背面、米沢側から望む。  
中央氷柱は根本で3本。北側氷柱(写真左側)は  
2本。南側氷柱(写真右側)が一番しっかりしてい  
るように見える。



写真 10-2 米沢側から望む巨大氷柱群背面 a。



写真 10-3 米沢側から望む巨大氷柱群背面 b  
(やや左側から望む)。



写真 10-4 米沢側から望む巨大氷柱群背面 c  
(やや右側から望む)。



写真 11-1 中央氷柱を南側から望む。



写真 11-2 南側氷柱(写真右)も角度を変えてみると  
吹き出し口が2箇所になっている。





写真 11-3 北側氷柱(右側)を福島側から望む。  
左側は奥の氷柱。



写真 11-4 北側氷柱側面を望む。  
南側氷柱(左)と中央氷柱の間から。



写真 11-5 奥の氷柱を望む。手前は、南側氷柱。



写真 11-6 奥の氷柱、福島側から望む。  
路面上に竹取物語のかぐや姫のような  
氷筍あり。



写真 11-7 竹取物語のかぐや姫のような氷筍。



写真 11-9 巨大氷柱背面、奥の氷柱を含め、  
米沢側から望む。  
sunny panda 様撮影提供 R030117



写真 11-8A 奥の氷柱を含む巨大氷柱群背面、米沢側から望む。



写真 11-8B 8 日前の巨大氷柱群。  
岡部達也様撮影提供 R30109

巨大氷柱群の内側は、あふれ出た水がそのまま凍ったような状態で、なめらかなに波うつ感じの厚い氷盤となっていて、登山靴や長靴だけでは滑って歩けず危険なのでアイゼン（滑り止め用として靴底に装着する金属製の爪）を装着する必要がある。氷盤の上には、氷柱のカケラがいくつか転がっていて落下したものであろう。また各氷柱の竹箒のような足下も実に美しい。 **(写真 12-1~5)**



写真 12-1 中央氷柱正面の足元。福島側から望む。



写真 12-2 北側(左端)及び中央氷柱背面の足元。  
米沢側から望む。



写真 12-3 北側氷柱背面の足元。米沢側から望む。



写真 12-4 中央氷柱の足元。米沢側から望む。





写真 12-5 南側氷柱背面の足元。米沢側から望む。

巨大氷柱の吹き出し口のように見える天井部は圧倒的な迫力である。この巨大氷柱群の箇所については通常漏水があるといっても 滲出<sup>しんしゅつ</sup>している程度で、特に湧水の顕著なところではないように思える場所である。目の前の巨大氷柱群を見ていると、どうしてこんなに大量の湧水があるのか不思議に思われるほどである。いずれにしても、当該箇所は内巻補修がなされた区間であり、元々漏水の激しかったところとも考えられる。内巻補修は、昭和 27 年度と 28 年度の 2 ヶ年にわたって実施されているが、当該箇所は最初の 27 年度に施工されていると思われる。さらに当初 (S8.5~S9.12) 施工された巻立コンクリート (トンネルの天井や壁のこと) の経年劣化が進んでいるところであることも確かであろう (巻末「参考資料」参照)。当該箇所は、例年巨大氷柱が見られるところである。

(写真 13-1~3)



写真 13-1 巨大氷柱群天井部 (吹き出し口)。  
左・南側氷柱、右・中央氷柱、奥・北側氷柱。  
福島側から望む。



写真 13-3 奥の氷柱天井部 (路面にかぐや姫のような  
氷筍)。



写真 13-2A 巨大氷柱群天井部(吹き出し口)。  
左・北側氷柱、右・南側氷柱、奥・中央氷柱。  
鉄筋が見えるが写真 2B と同一のものである。  
米沢から望む。



写真 13-2B トンネル天井部、写真 2A 箇所付近。  
平常時期の状況、水が滲出している程度。  
コンクリートが剥落、剥き出しの鉄筋は  
写真 2A と同一のもの。R021105

### (3)米沢側坑口の巨大氷柱群

当該巨大氷柱群から米沢側坑口までは 300m弱と思われる。その間、米沢坑口までは特に顕著な氷柱は見当らない。米沢側坑口から百数十mのところ<sup>ひょうじゆん</sup>に第 4 号内巻がありその米沢側端部の右側に覆工(巻立)コンクリートが大きく崩落しているところがある。年々崩壊が進み現在は頂部にまで及んでいて大崩落が生じトンネルが閉塞されるのではないかと懸念される。崩落土石は柱状になっていて玄武岩ではないかと思われる。当該箇所は、通常ほとんど湧水は見られないところであるが小さな「つらら」があり、その路面には小さいながら氷筈が見られる。またそこから米沢側に少し進んだ所に第 5 号内巻区間があり、その米沢側(坑口から約 100m)では福島側の門番のような氷柱が天井から見られることもあるが、今回は落下したものであろうか路面に氷塊が散らばっていた。福島側坑口では雪の吹き込みはほとんど見られないけれども、米沢側の雪の吹き込みは例年この辺りまで 100mほどもあり西風の凄まじさを彷彿とさせる。

(写真 14-1A~4)



写真 14-1A 覆工(巻立)コンクリート崩壊箇所のつらら、下に氷筈。第 4 号内巻箇所米沢側端部。米沢側から望む。



写真 14-1B 天頂部覆工(巻立)コンクリート崩壊箇所、写真 1A 箇所を真下から見たもの。第 4 号内巻区間米沢側端部。R021105





写真 14-2 米沢側坑口から約 100m 付近、第 5 号内巻区間  
米沢側端部。中央につらら、氷柱は落下か、  
氷塊が散乱。奥に第 4 号内巻区間の米沢側端  
部と崩壊箇所をつららが見える。  
米沢側から福島側を望む。



写真 14-3 第 6 号内巻(米沢側坑口まで続く約 80m)  
米沢寄りから米沢側を望む。  
左奥に坑口部巨大氷柱群が見える。



写真 14-4 第 6 号内巻(米沢側坑口まで続く約 80m)  
米沢寄りから福島側を望む。  
奥に微かに第 5 号内巻の米沢側端部が見える。

さて、いよいよ巨大氷柱の最後の場所となるけれども、米沢側坑口の「明り巻<sup>あかりまき</sup>(注 1)」区間(約 30 m)の中間付近左側(南側)に覆工(巻立)コンクリートが部分的に崩落していて坑外の景色が覗けるようになっている場所があり、その開口部(穴)の回りに数本の巨大氷柱が見られる。例年であると、覆工コンクリート(側壁部)が連続して剥落(はがれ落ち)している奥の方まで続き、まるで滝が凍りついたような乳白色の連続した巨大氷柱(或いは氷壁)が見られ壮観である。しかし今年は残念ながら若干寂しい風景になっているようである。

ところで、米沢側坑口の上は谷間状の地形になっていて、仮称白竜沢(注 2)があることからその流水の一部が流末となって当該覆工開口部に流れ込んでいるところである。また、この区間は内巻補修区間内(第 6 号)でもあるけれど、開口部の少し福島側の側壁部のコンクリートが劣化して連続的に剥落している。

(写真 15-1A~6)



写真 15-1A 米沢側坑口左側の氷柱群  
(覆工コンクリート崩落箇所)。



写真 15-1B 8 日前の巨大氷柱群。  
岡部達也様撮影提供 R30109



写真 15-2 米沢側坑口から福島側を望む。



写真 15-3 米沢側から望む。



写真 15-4 正面から望む巨大氷柱群。



写真 15-5 巨大氷柱群吹き出し口。  
覆工コンクリート崩落箇所から外を見る。





写真 15-6 巨大氷柱群の足本。

#### 注 1 明り巻(あかりまき)

トンネルは通常、地山（地中）を掘削して洞穴にした後にコンクリート等を用いてその表面を覆うことで、壁や天井を造り空間を確保する。この作業をコンクリートの巻立まきだてという。巻立されたものを覆工（コンクリート）と云う。

「明り」とは、トンネルに対して用いられる言葉で、トンネル以外の道路の部分の部分を云う。すなわち明り巻とは、地中ではなく、地上（坑外、明り部）でドームのようなトンネルを造ることである。地中の場合と同じようにコンクリート等で天井や壁を造る（巻立）ものである。

#### 注 2 仮称白竜沢について

普通に見られる比較的小さな沢で名称不詳につき報告書記述上不便なので仮称で呼んでいるもの。下記サイトを参照されたい。

○『平成 26 年大滝会万世大路秋期探訪会報告』

<http://ootaki.xsrv.jp/26akitan2.pdf> （「その 2」9 頁～）

なお、当該箇所では、平成 23 年 2 月には覆工崩落箇所開口部付近のトンネル中央に巨大な氷柱が見られた。しかし、その後は今年も含めてこの中央部の巨大氷柱は見られていないようだ。20 年以上長年にわたり二ツ小屋隧道の巨大氷柱を観察してこられた山口屋散人さんによると、後にも先にもあの時（H23.2）だけだったようだ。平成 23 年 2 月の巨大氷柱の様子は別添特集記事に掲載しているので参照されたい。

この平成 23 年 2 月は、東日本大震災の丁度 1 ヶ月前のことで、今年はその大震災も 10 年目の節目の年になる。

二ツ小屋隧道の米沢側坑口は、例年のことであるが福島側坑口より雪が多い。また、坑口には雪庇が発達していたけれども、栗子山からの西風をまともに受け日当たりも悪く吹き溜まりとなるであろう。この坑口から烏川橋までの旧国道は、北向き斜面と云うこともあって 5 月の連休頃まで雪が残り除雪をしないので車両の通行ができない。

(写真 16-1~3)



写真 16-1 坑内から米沢側を望む。



写真 16-2 坑口から米沢側を望む。  
雪庇が発達しているのが分かる。



写真 16-3 米沢側坑口

## 雪の新沢橋報告

帰路、新沢橋と「殉職警察官之碑」に立ち寄り積雪状況を確認してきたので紹介する（E13 東北中央自動車道新栗子トンネル含む）。

(写真 17-1~6)



写真 17-1 新沢橋・殉職警察官之碑上り口  
(取付坂路)。  
左側、国交省観測小屋。  
二ツ小屋駐車帯から望む。



写真 17-2 新沢橋全景、現国道 13 号から望む。





写真 17-3A 雪に埋もれた「殉職警察官之碑」  
(森元源吾巡査・写真中央左側の  
こんもりしたところ)と写真奥、新沢橋  
(第3代)。米沢側から望む。



写真 17-3B 「殉職警察官之碑」(森元源吾巡査)  
と新沢橋(第3代) H230503



写真 17-4 新沢橋、米沢側から福島側を望む。



写真 17-5 雪の新沢橋(第3代)。  
新沢右岸(米沢側)下流側から望む。

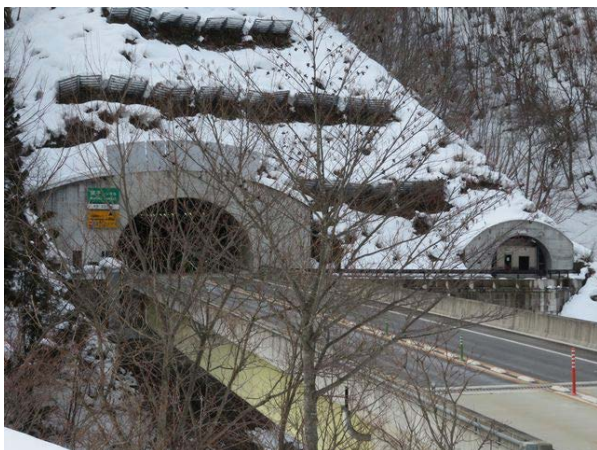


写真 17-6 E13(東北中央自動車道)新栗子トンネル  
福島側坑口(右側避難坑)。

## おわりに

二ツ小屋隧道からは12時半頃引き返した。1時間半弱の滞在であったが、十分に巨大氷柱を堪能することができた。二ツ小屋駐車帯には13時半前に戻り、そのあと個人的に新沢橋や新栗子トンネルを見学しながら帰途についた。

当日の参加者は、「万世大路をこよなく愛する」何時もの山友、案内人山口屋散人さん・藤田班長さん・sunny pandaさん・dark-RXさん、それに筆者の5名と一般の方3名（記者含む）の計8名である。

なお、冒頭案内の通り今回は特集記事に別添として掲載している。

## 【謝辞】

大滝会 HP 管理人紺野文英様にはいつものように編集作業をして頂き感謝申し上げます。

また、現場案内の山口屋散人さんには冬山道具1式を借用し、山友の皆様山口屋散人さん・sunny pandaさん・dark-RXさん・おばらさん・まちセン本間さんには貴重な写真を提供して頂きました。衷心から御礼申し上げます。

## 《ご注意》

本レポートは、当該「二ツ小屋隧道巨大氷柱」見学を一般の方々にお奨めするものではありません。冬期の二ツ小屋隧道に行くためには完全な冬山装備が必要であり、何よりも冬山登山の豊かな経験を持ち、かつ当該地形を<sup>ちしつ</sup>知悉したガイドさんに案内して貰わないと行ける所ではありません。一歩間違えば重大事故に繋がることとなり大変危険な場所なので、単独行動を取られることのないようくれぐれも注意して下さい。

以上